

平成 21 年 6 月 23 日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18720112  
 研究課題名(和文)要支援高齢者とその周囲の人たちとの間で交わされる言語表現の傾向(様態)について  
 研究課題名(英文)Patterns of talk between elderly people, their home-helpers and others

研究代表者  
 小野田 貴夫(ONODA TAKAO)  
 常葉学園短期大学 日本語日本文学科・講師  
 研究者番号：20413247

## 研究成果の概要：

インタビューや自然発話の談話分析により、高齢者の話の冗長性(長い、またはくどいと感じられる)は、同じ話題の「反復」と経験談を主とする「エピソード形式の語り」から成り立っていることが確認された。「反復」は、マイナスのイメージを伴う話題(過去や現在の不幸)やプラスの自己評価に関する話題に多くみられる。また「エピソード形式の語り」は、高齢者の居室におけるホームヘルパーとの業務中の(共感的な)会話においても多く現れる傾向がある一方で、(たとえばケアマネージャや家族による)運動や食事等に関する健康管理や生活態度についての指示・指導に対して抵抗するとき(努力によっては改善の余地がない、またはすでに精一杯の努力をしていることを力説するとき)にも、多く現れることが観察された。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	1,000,000	0	1,000,000
19年度	600,000	0	600,000
20年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	150,000	2,250,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・社会言語学

キーワード：高齢者、ヘルパー、ケアマネージャ、要支援、コミュニケーション、反復、エピソード、談話分析

## 1. 研究開始当初の背景

家族関係や地域での人間関係が希薄となるなかで、高齢者は、他の人とコミュニケーションを取る機会が減少している。また高齢者との会話が(密かにまたはあからさまに)避けられる場合もあり、高齢者の話し方、話す内容にも、その一因があるように感じられ

る。高齢者の社会的な関係性とコミュニケーションの実際を知るために、高齢者が日常生活のなかで誰と何をどのように話しているのか調査する必要がある。そこから高齢者の人間関係を回復するために必要なことも見えてくるだろう。あまりにも身近な存在であったためか、高齢者の自然発話を対象とした

研究は、数少ない。本研究においては、高齢者が、主にヘルパーやケアマネとの業務中の会話内容を記録し、分析の対象とした。

## 2. 研究の目的

加齢による心身の不調を自覚せざるを得ないような条件にある（介護保険制度による認定の）要支援高齢者（以下、高齢者）を対象として、日常生活場面での会話のなかで、誰とどのような言葉を交わしているのか、その関係性と言語表現の傾向を理解する。

## 3. 研究の方法

要支援高齢者計 21 名（うち 16 名は一人暮らし）を対象とした。インタビューにより、日常的なコミュニケーションの状況について調査。その後、来訪者との自然発生的な談話を記録し、文字化した。定期的な来訪者は、主にホームヘルパーとケアマネージャ。分析内容は、来訪中に記録された談話のなかでの話題の推移、会話の途切れる時間（会話が継続される時間と無声時間の比較）、会話量（文字数による高齢者とその相手との比較）等である。

## 4. 研究成果

### (1) 高齢者の話す内容・話し方の特徴（傾向）について

介護者及び介護施設職員より、高齢者の話し方についての印象をインタビュー及び自由記述によって調査した。特に聞き手がストレスを感じたり敬遠したくなったりするような高齢者の話し方としては、冗長性（くどい、または長い）が指摘され、また話す内容としては心身の不調にかかわることや過去の不幸なエピソードが多いこと等が指摘されていた。この指摘は、実際に、対象となる高齢者へのインタビューやその他の自然発話による談話記録にも、非常に多く確認することができた。特に高齢者の語りの冗長性は、同じ話題または類似した話題の「反復」と、「エピソード形式の語り」（経験的な話題）によって生じていることがわかった。たとえば、現在の体調不良（手術後の過程等）や、過去に経験した大きな苦勞または不幸（商売の失敗や家族間の衝突等）について繰り返し口にすること（反復）や、抽象的な質問（「週何回ほど外出されますか？」等）に対して個別的な経験談（「先週は、スーパーに行った帰りに、ちょっと遠回りして美容院に行こうとしたら、途中で調子が悪くなっちゃって・・・」等）によって答えようとする（エピソード形式の語り）等である。

### (2) 高齢者とヘルパーの会話の特徴（傾向）について（ヘルパー利用の高齢者 4 名とヘルパー 4 名との組み合わせで 7 ケースの談話記

録より）

ヘルパーが高齢者宅において、居室の掃除、洗濯等のヘルプを実施している最中の談話記録から、ヘルプの実施時間の間中、ほぼ絶えまなく会話が続けられていることがわかった。また会話の話題は、ヘルプの実施に不可欠な内容（作業内容の確認等）よりも、雑談に多くの時間が割かれていた。実際に対象とした一人暮らしの高齢者は、家族や友人との会話が、日常的には生じておらず、会話があっても電話で済ませてしまう程度で、むしろ定期的にやってくるヘルパーとの会話量のほうが、圧倒的に多かった。またヘルパーの訪問前後のインタビューでは、ヘルパーとの会話を生きがいに行っていると答える高齢者も少なくなかった。

話題の展開の仕方にも規則性が認められた。高齢者の日常生活空間である居室において、ヘルパーは、業務を行う。業務の実施にあたっては、これから実施することや実施している内容の状況について高齢者に確認を取ることが必要でありマナーともなっているが、そこで話題とされる事物、たとえば洗濯物や居室内の片付け物は、すべて高齢者の生活によって意味づけられており、すぐに生活感覚や経験的なエピソードを連想させるようになっている。またのちに述べるケアマネージャのように指示的・指導的な職務をヘルパーは積極的に負っていないため（または家族関係のような利害もないため）、共感的な姿勢を維持しやすく、一度話題に上がった事物から、より生活に密着した話題へと連想を運びやすい。居室という環境と、高齢者-ヘルパーという（指導的ではない）共感的な関係性とが、親密な会話（雑談）を誘うことになる。

例 1：「高齢者（女性）- ヘルパー」の会話において居室の状況についての指摘から雑談に話題が移る過程

ヘルパー<掃除中に羽蟻の死骸を見つける>

高齢者<冗談でいっしょに生活していると言う>

ヘルパー<息子が家の中の虫に名前をつけた話をする>

二人で<それぞれの子供の話へ>

例 2：「高齢者（男性）- ヘルパー」の会話において業務内容の確認から雑談に話題が移る過程

ヘルパー<ズボンの裾の長さを直したほうがよいが、確認する>

高齢者<必要ないと答える >

ヘルパー<裾が長ければ折り返すか、（冗談で）足

を伸ばそう、と言う>

高齢者<自分は体が小さくて困るという>

ヘルパー<冗談で足を引っ張り伸ばそうと言う>

高齢者<今の人は牛乳が飲めて幸せだ、2年間続けて飲めばかなり身長が違うのだと言う>

二人で<牛乳の効果について議論する>

(3)高齢者とケアマネージャとの会話の特徴(傾向)について(ケアマネ利用の15名について15ケースの談話記録より。うち6名の6ケースは、担当ケアマネとの自然発話。残り9名の9ケースは、担当ケアマネによる半構造的なインタビュー。)

介護予防計画を担当しているケアマネージャとの談話記録からは、ケアマネージャが、介護予防や日常的な体調管理についてのテーマを高齢者に投げかけると、高齢者が抵抗を示す様子が、共通に確認できた。ケアマネの職務として、要支援高齢者のための介護予防計画を作成し、その趣旨を説明しながら計画実施の同意を得るという手続きがあるが、その手順通りに進めていく場合ほど、高齢者は、介護予防の理念や体調管理への指導に対して、反論をした(介護予防など理念にすぎず、心身の能力の低下を止めることなどできないこと、ましてや一度低下した能力の回復は努力によっては望めないこと等が主張されている)。現実的に介護予防やリハビリが可能であるか、というよりも、介護の予防可能性やリハビリの可能性を、高齢者の意思や努力に求めるようなケアマネの表現に抵抗をしめしており、さかのぼって要支援の状態になったこと自体が、高齢者自身の怠惰や意思の弱さに原因があり、そのことを責められているかのように、高齢者は受け取る。介護予防の理念や介護予防計画の実施を説いたときに高齢者に抵抗された場合、ケアマネによるディスコース上の戦略としては、高齢者にとっては否定しようのないより身近で具体的な個々の問題(食事や服薬の管理不足や運動不足等)の指摘に話題を移し、「ちょっとした」努力で改善可能であることを力説する。また高齢者による抵抗の戦略としては、現在の体調不良が、避けようのない不幸であることを、具体的なエピソード(遺伝的な素因や、努力が報われなかった事例、努力を挫く外的な障害、より権威のある人(たとえば医師)による不可避の病であることの認定等)によって伝えようとする。(1)で述べた高齢者の話す内容や話し方の特徴で指摘した「反復」と「エピソード形式の語り」が、多く出現するのも、この抵抗の場面である。例1:「高齢者-ケアマネ」の会話において介護予

防の理念・計画に抵抗を示す過程

ケアマネ<介護予防の理念と計画内容について説明>

高齢者<医師からリハビリも今はしなくてよいと言われている。現在の体調不良は、鶏肉を食べたせいだ、と訴える>

ケアマネ<近所の散歩からでもいいからリハビリを>

高齢者<脳出血をしたせいでリハビリはできない。部屋のなかで自分なりの運動をやっているから散歩はしなくてよい>

例2:「高齢者-ケアマネ」の会話において介護予防の理念・計画に抵抗を示す過程

ケアマネ<介護予防の理念と計画内容について説明>

高齢者<心臓に6つの病気があることを伝える>

ケアマネ<理念と実際の違いについて説明(無理を言うつもりはない)>

高齢者<通院途中でトラックにひかれそうになったエピソード(通院でさえまならないのに介護予防などできるはずがない)>

ケアマネ<医師から指示された水分量が維持できているか(できることから健康管理を)>

高齢者<医師に誤診があったエピソード(医師も間違えることがある)>

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

小野田貴夫, 高齢者とヘルパー/ケアマネの会話について, 常葉学園短期大学紀要, P. 25-39, 39号, 2008.

小野田貴夫, 高齢者とヘルパーの会話の特徴について, 常葉学園短期大学紀要, P. 21~40, 37号, 2007.

小野田貴夫, 高齢者の語り=話の特徴を理解するために, 常葉学園短期大学紀要, P. 23~34, 37号, 2005.

[学会発表](計3件)

小野田貴夫, 高齢者とヘルパーの関係性と会話の特徴, 社会言語科学会, 平成21年3月

29日,東京外国語大学.

小野田貴夫,表象としてのケアマネージャ,  
日本ケアマネジメント学会,平成19年6月22  
日,北海道厚生年金会館.

小野田貴夫,高齢者の話す内容・話し方の  
特徴について,社会言語科学会,平成19年3  
月4日,日本大学.

〔その他〕

小野田貴夫,「呼び方」が示す介護職のピ  
ミョーな立ち位置,月刊ケアマネジメン  
ト,P.41,2008.5月号

小野田貴夫,ケアマネジャーという仕事は  
社会からどう見られているか,月刊ケアマネ  
ジメント,P.34~35,2007.8月号

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小野田 貴夫(ONODA TAKAO)  
常葉学園短期大学・日本語日本文学科・講師  
研究者番号:20413247

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者